

古墳文化が花開くまで④

日本人の主食となっている『米』。英語では『ライス』の一言で表わされるが、日本語では、植物の状態を『稲』、炊いた状態を『ご飯』などと区別している。他にも『玄米』『白米』『粳』、『うるち米』『もち米』『お粥』など、『米』を表現する言葉はたくさんある。それだけ『米』が日本文化の中で重要な存在であることがわかる。



日本において、米作りが人びとの生活の基盤となっていた時代は『弥生時代』と呼ばれている。水田での米作り（水稲農耕）が大陸から日本へ最初に伝わった時期は、約

3000年前とされている。まず九州北部で始まり、西日本からやがて東日本へと広がっていった。水田での米作りが始まる以前から畑での陸稲の栽培は行われていたが、陸稲の収穫量は水稲と比べるとわずかであったため、水稲農耕は積極的に受け入れられていったと考えられている。約2300年〜約2200年前には多くの地域で水稲農耕による食料生産が本格化していたようである。水稲農耕が伝わった背景には、海の向こうの大陸や朝鮮半島からの人びとの渡来（渡来人）があったとされる。渡来人は稲の種籾だけでなく、水路・堰などの灌漑施設を作る技術や、石包丁などの大陸系磨製石器、鍬・鋤といった木製農具、水稲農耕に関わる風習などを伴ってやってきた。またその頃はたびたびの渡来があり、後に青銅器・鉄器ももたらされた。特に鉄器は、農業技術・建築土木の急速な発達を促した。土器作りにおいても大陸の影響を受けながら、製作技術を進歩させていった。『弥生土器』の登場である。高温で焼かれるようになったため、それまでの縄文土器に比べ、薄く硬



約2,000年前の町内出土の土器

い土器を作ることができた。また文様は簡素なものが多くなり、調理用の甕、保存用の壺・盛り付け用の鉢・高坏など機能面を重視した形態となった。

当時の米作りは、種籾を直接田んぼに播いていたり、実った穂の部分だけを刈り取って収穫していたりといった点で、現在の米作りとの違いはあるが、自然のサイクルの中での田植えから稲刈りまでの流れは基本的に変わっていない。渡来人もともと日本列島にいた縄文人とが少しづつ交じり合いながら形成していった発展的な文化⇨弥生文化は、今日に続く日本文化の礎である。ただ、狩猟・採集・漁労を生業とする食料獲得の縄文時代から、米作りによる食料生産の弥生時代への転換は一面

的なものではなかった。約1万年間にわたり培われてきた縄文文化と、水稲農耕・金属器といった外来文化とが結びついて形づくられた弥生文化であるが、その結びつき方は一様ではなかったため、地域によって展開がさまざまであったと考えられている。

そういった時代の中で、食料基盤の安定と技術の発展を手にした人びとは、一方で負の側面も受け入れることとなった。さて、負の側面とはどのようなものであったのだろうか？そして、その頃の私たちの郷土はどうなっていたのだろうか？

弥生時代―新しい社会が形成されていく変革の時代であった。(続く)

